百年の計、変わらぬ思いと進化する由布院

3

一般社団法人由布院温泉観光協会長
株式会社玉の湯 代表取締役社長
桑野 和泉

本誌『観光文化』では、折にふれて、由布院のまちづくりをご紹介いただいている。

二〇一二年（平成二十四年）十月、215号の特集「観光地づくりの本質を探る」で、元由布院観光総合事務所事務局長で、現在、愛媛大学法文学部総合政策学科講師の米田誠司さんが「観光とまちづくりの間にあるもの～由布院の四十年の足跡から見えること」として寄稿されている。

今回の223号でも、当協会事務局長の生野敬嗣が「持続可能な地域であるために」と題して寄稿している他、（公財）日本交通公社編著で昨年十二月に出版された『観光地経営の視点と実践』では、事例の一つに由布院が「百年先を見越した観光地経営の実践」（後藤健太郎研究員担当）と題して取り上げられている。

写真1　由布院盆地の「静けさ」「緑」「空間」に抱かれて（写真提供：（一社）由布院温泉観光協会）

今、由布院のまちづくりにおける不易流行の「不易」については、多くのところでしっかり語られているように思う。今回の執筆にあたり、私は、由布院に生まれ育ち、温泉旅館を生業とする者として、特に「流行」を中心に日々感じていることを記したい。

由布院における「不易」、まちづくりへの思い

私が幼い頃、由布院は「奥別府由布院」と表現されていた。鄙（ひな）びた温泉地というか寒村で、訪れる人は少なかった。

今でこそ年間三百八十万人のお客様を迎えるようになったが、由布院は決してまちづくりの成功事例などではなく、絶えず多くの悩みを抱えながら歩みを続けている小さな温泉地だ。

由布院のまちづくりは、一九二四年（大正十三年）、日本で最初の林学博士、本多静六氏の由布院での講演に起源を求められる。

あれから九十年。「ドイツの保養温泉地を目指しなさい。滞在できる温泉地を目指しなさい」との提言は、今でも全く古さを感じさせないばかりか、『由布院温泉発展策』は、私たちのまちづくりのよりどころにな

っている。

滞在型保養温泉地の基本は「静けさ」「緑」「空間」。

「静けさ」がある町でありたい、「緑」がたくさんある方がいい。でも外の人とつながるような「空間」でありたい。ワクワクする時間や興奮のエネルギーが渦巻く時間、人々が出会う機会がある町でありたい……。そんなこの地で語り継がれている多くの重要なことの原点がここにある。

由布院のまちづくりが走りはじめるのは、中谷健太郎さん（亀の井別荘）が由布院に帰ってから数年後のこと。

中谷健太郎さん、故・志手康二さん（夢想園）、私の父、溝口薫平（玉の湯）の三人が欧州視察の旅に出かけたのが一九七一年（昭和四十六年）。この成果として、滞在型保養温泉地を目指す「クアオルト構想」が町の施策として位置付けられていった。

まちづくりの機関誌『花水樹』が発刊されたのは一九七〇年（昭和四十五年）、その創刊号の中谷さんの記には、由布院のまちづくりの精神が高々と掲げられ、朗々と謳（うた）われている。これがまさしく由布院スピリッツだと思う。由布院には、この『花水樹』の他にも『風の計画』（一九八八年創刊）など、節目には必ず記録がある。

一九七〇代から始まった「映画祭」「牛喰い絶叫大会」は今も続いている。「ゆふいん音楽祭」は三十五年をめどにいったん終了したが、その後は町なかでの多様な音楽との出会いへとつながっている。

「文化・記録映画祭」
「料理研究会」
「アートストック」
「風の食卓祭」

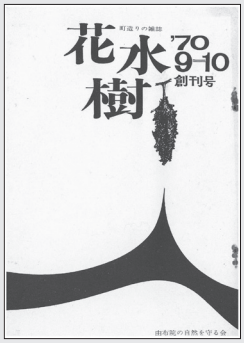
などのイベント等も生まれている。この小さな町で生まれる出会いの場が人を育て、地域が人を育てていることに心地よさがある。

もう一点、由布院が変わらず大切にしてきたこと。

由布院ではずっと、「ヒューマンスケールの町」ということを大事にしてきた。由布院盆地というほどよい広さの空間に暮らし、人と人が地域の中で出会える幸せを大事にしてい

『花水樹』にみる由布院スピリッツとは

『花水樹』は、猪の瀬戸湿原におけるゴルフ場建設計画への反対をきっかけに、住民主体で組織された「由布院の自然を守る会」のメンバーを中心に行われたまちづくりの議論と運動を、赤裸々に記録した小草紙である。一九七〇年（昭和四十五年）から七三年（昭和四十八年）にかけて、中谷健太郎さんを編集人、岩男彰さんを発行人として九冊が発行されている。



『花水樹』創刊号表紙

創刊号の冒頭「町造りの雑誌『花水樹』を発刊する理由」の中で、中谷さんが次のようなことを語っている。

……（略）……
由布院は美しい町です。
……（略）……
「由布院の何が美しいのか？」
この問題をつきつめて考え、その正体を見極めるべきだと思います。そしてその正体が判った時はもう生命がけでその「美の根源」を守り育ててゆくべきだと思います。それだけが私たちが子孫に残してやれる大きな遺産になる筈です。
由布院の魅力の正体を知った上で私たちがどんな家に住み、どんな食べものを愉しみ、どんな樹の繁る路を歩き、どんな産業で生計を立てるべきかといった問題を考える――それが私たちにできる唯一の町造りの方法である筈です。
……

きたいという考え方だ。自分たちの町といえる幸せがある。そこには心地よい風が吹き、自由な空気が流れている。

想いをつなぐ、世代交代に思う

中谷健太郎さんの後を継いだ由布院温泉観光協会長の志手淑子さん（夢想園 会長）は、次世代を育てることに全力で臨んだ。同時に市町村合併の議論の中で若手も鍛えられていった。「これからは若い人が観光まちづくりの主役である」と。今、協会の理事は三十～四十代が中心だ。この世代がきちんと物事を考える立場にいること、それを七十～八十代が支えるという組織づくりが大切だと思っている。

先輩世代がいないと町は成り立たない。山積する課題に対処するには経験に基づく知恵が必要である。

例えば、住民生活にも大きく関わる交通や景観の問題では、住民と折り合いをつけていくことが求められる。そうしたときにどの世代も

写真2 東京大学大学院下村彰男教授研究室での勉強会（写真提供：筆者）

写真3 カーフリー・リゾート、環境先進地「ツェルマット」に学ぶ

が一緒に議論していく。若い人たちに任せるのではなく、判断が必要な場面には上の世代の人たちに入ってもらってやっていく。そうすることで次世代が育ってくる。まちづくりは次世代がいないと持続できないし、やり続けていくことが肝要だ。

地域の中で人が育っていくには、たくさんの出会いの場が必要で、由布院という町はその場を用意してきた。そんな出会いの場は外にも必要で、私たちは国内外に出かけるようにしている。

例えばツェルマット（スイス）に出かけて行き、カーフリー・リゾート（車を入れない山岳リゾート）はどういう仕組みなのか、その財源は？ 由布院でもできることがあるのではないかなど、そこに私たちのあるべき姿を学びに、皆で出掛けて行っている。

行政との関係に変化

由布院は、長らく民間主導でまちづくりを行ってきた。もちろん、まちづくり条例の制定など行政にしか

できないことは、「対立的信頼関係」に基づく議論を戦わせて一緒に作ってきた経緯はあるが、基本的に自分たちでできることをまずやってきた。

しかし、二〇〇五年（平成十七年）の三町合併で由布市となり、厳しい現実が立ちはだかっている。例えば、〝映画館一つない町、しかしそこには映画がある〟というキャッチフレーズで始まった「湯布院映画祭」は来年で四十回を数えるが、いまだに中央公民館での開催で、レセプション会場にも困っている有り様だ。何よりお越しいただいたお客様に基本的なインフォメーションすら提供できていない惨状でもある。

今、由布院でお客様が過ごす空間は、旅館や商店をはじめとした個人の空間であり、地域の魅力を伝え快適に過ごすことのできる公共の空間はほとんどないのが実情だ。

このままでは問題だと思っている。今こそ行政と民間が連携して魅力的な公共空間をつくるときだと強く思う。そのことが次の十年、二十年につながり、そのプロセスで人も育つと考えているからだ。吹き抜けで

写真4　住民も旅人も多くが集う空間「由布院駅アートホール」
（写真提供：（一社）由布院温泉観光協会）

開放的なロビーと待合室とギャラリーを兼ね備えたスペース「由布院駅アートホール」が特徴的な由布院の駅舎が出会いの場となり人を育てたように、由布院では良質な公共空間が人を育てる一つになるのではないだろうか。

由布市では今春、行政と観光関連団体が連携して新しい観光支援組織を作ろうと、観光課内に設立準備室が設置された。

全てはこれからだが、人口減少社会の日本にあって、行政と民間が一体となり、この小さな町にどう人を迎えていくのか、これまでの経験やそこから得た知見を生かして、行政とともに考え創造していけるはずだ。

また、由布院ばかりではなく市町村や県をも超えて九州のご案内ができるような「ツーリスト・インフォメーション・センター」をつくりたい。そこには旅の図書館的な機能があってもいいし、バザールがあったら楽しい……。行政とともに一歩を踏み出すことに、夢は広がる。

つながりは九州へ

二〇一四年（平成二十六年）七月の訪日外国人客は百二十七万人で過去最多だった。年間の訪日外国人客は千二百万人を突破するとの見通しも示され、「東京オリンピック・パラリンピック」が開催される二〇二〇年（平成三十二年）には二千万人を目指すという。

私は地方で観光に携わる者として、外国のお客様には東京や京都といった都市ばかりではなく日本の地方、田舎をぜひ訪れてもらいたい。そのためには、それぞれの地域が個性を磨きつつも連携して、多様で魅力的なエリアを形成していくことが大切だ。

幸い九州では、「ななつ星 in 九州」というクルーズトレインが運行されている。かなりの高額商品だが、質が高くそこしかないものだったら乗りたい人がいるということに気づかされ、勇気づけられた。

しかし、三泊四日のコースでお客様にご満足いただくには、九州全体が魅力的でないと難しい。だからこそ、この列車が走るエリアの人たちは乗客をどうお迎えするかを、本当によく考えている。地域は十年、二十年とか時間をかけて変わっていく。今、地域は、九州は確実に変わり始めた。

写真5　由布院の皆さんに出迎えられる「ななつ星in九州」
（写真提供：（一社）由布院温泉観光協会）

世界の人たちをお迎えできる九州になれば、由布院も生き残っていけるはずだ。そのためには、より質を高めていくべきで、

〝良質なものを地方でつくらずしてどうする〟

との気概を持ち、これからの由布院のまちづくりに取り組んでいきたい。〝地方にしかつくれないものを、どのくらいつくっていけるか〟が、私たちの勝負どころだ。

私たちは、百年の計を見据えて、由布院スピリッツを持ち、焦らずに確実に日々の生活の中で取り組みを続けていきたい。

私が子ども時代によく聞いた言葉に、「由布院の人に会いに来る」というのがあった。いろんな魅力的な人が住んでいる町でありたいと願う。

（くわの　いずみ）

桑野和泉（くわの いずみ）
大分県湯布院町（現由布市）生まれ。株式会社玉の湯代表取締役社長。家業の宿「由布院玉の湯」の専務取締役を経て、二〇〇三年十月、代表取締役社長に就任。町づくりなどの市民グループの代表、世話人を務める。現在、一般社団法人由布院温泉観光協会長、公益社団法人ツーリズムおおいた副会長。ほかに大分銀行社外取締役、九州旅客鉄道株式会社取締役（非常勤）を務める。